

「木」も「森」も見る教師

高橋貞雄 Takahashi Sadao
(玉川大学)

教科書編集に長年携わっていると、様々な質問を頂戴する。たとえば、tooの前にコンマが要るのかどうか、someoneの代名詞は何で受けるのか、あるいは英語の教科書なのになぜ中国人が出てくるのか、等々である。片や規範文法や記述文法の問題、片や英語教育観に関するものまで様々である。このようなことを振り返っているときに、「木を見て森を見ず」という言葉を思い起こした。教師や学習者の中には、木どころか枝や葉ばかりを見ている人はいないだろうか。あるいは森だけを見ていて、森を構成している木をないがしろにはしていないだろうか。

公教育に携わる英語教師は、木も森も見る必要があるのではないかと私は思っている。ここでは、木と森のメタファーを手がかりに、英語教育にかかわるいくつかの概念を対比させて議論してみたい。

1 広角レンズとズームレンズ

H. Douglas Brownは、*Strategies for Success* (Longman, 2002)という言語習得について書かれた書物の中で、カメラの交換レンズというメタファーを使って、言語を学ぶ際に、その言語を広角レンズで見るとズームレンズで見るとがたと述べている。子どもは特に広角レンズを使って言語全体を見る傾向があるのに対して、大人はズームレンズを使って言語の細部を見る傾向がある。また、大人の場合であっても、広角レンズを多用する人もいる。これは脳科学的に言えば、総合的な右脳による学習と分析的な左脳による学習ということになる。Brownによれば、言語学習にとってはどちらが良いということではなく、バランスをとることが大事である、という。私の喩えで言えば、木も森も見る必要がある、ということと同様である。

2 正確さと流暢さ

正確さ (accuracy) と流暢さ (fluency) の対立はどうだろうか。この点も英語教育では長い間議論されてきたことである。従来は単語や文構造の正確さが重要視され、会話などのことばのやりとりにおいて、流暢さが軽視されてこなかっただろうか。

日本人の学習者などについてよく言われることであるが、文法的に正しいことを言おうとするあまり、頭の中でいったんリハーサルをしてから口にする場合がある。これでは会話が途切れ途切れになり、気まずい雰囲気になってしまう。英語で日常会話をスムーズに行うためには、何を言うかよりも何かを言うことの方が大事である、とも言われる。もっとも、正確さを無視してことばを発するだけだと、その人の品性や教育のレベルを疑われる場合もあるので、注意が必要である。

3 質と量

上と似た概念であるが、質 (quality) と量 (quantity) の対立も重要である。これはライティングの指導を例に考えると分かりやすい。たとえば、将来の夢についてエッセイを書かせたとしよう。A君は5文で、B君は10文で書いた。文法的な観点では、A君の方が間違いが少なかった。その場合、どちらが良いエッセイだと言えるだろうか。質に重きを置いて採点したらA君、量に重きを置いて採点したら、B君の方が良い評価をもらえることになる。

また、エッセイの場合には、内容という観点も重要である。A君とB君のエッセイでは、どちらが自己表現ができているか、説得力があるか、といった観点である。このような、質と量の対立は、精読 (intensive reading) と多読 (extensive reading) の

ように、リーディング指導についても言える。

4 形式と機能

言語表現については、形式(form)と機能(function)という概念がある。この両項は対立とは言えないかもしれない。なぜなら、ある種の形式(文や発話)は、それが使用されるときに何らかの機能を持つからである。たとえば、Look at the bull. という文を見てみよう。これは命令文という形式を持っているが、この文を見ただけでは、牛がいるから気をつけろと警告しているのか、牛と一緒に写真を撮ろうと誘っているのか分からない。また命令文は命令をするためにのみあるわけでもない。ふつう、命令をされるのはいやなものであるが、命令文を聞いて嬉しいこともある。たとえば、パーティで、Have these sandwiches. と言われた場合である。

新学習指導要領においては文法(文構造)が重視されているが、「文法については、コミュニケーションを支えるものであることを踏まえて」指導するようという説明がある。これは、文法の形式だけを教えるのではなく、その形式がコミュニケーションにおいて、どのような場面でのどのような目的のために使用されるのかを踏まえて指導してもらいたいということである。

5 正確さと適切さ

言語使用では、適切さ(appropriateness)という観点も重要である。今までは、基礎・基本の教育という観点で、正確さに重きが置かれていたが、これからの英語教育(コミュニケーションを重視する英語教育)においては、適切な言語使用をもっと重視していくべきではないだろうか。適切な言語使用とは、端的に言えば「正しい文を使っただけでは良好なコミュニケーションが成立するとは限らない」ということである。たとえば、見知らぬ人に道を尋ねるときに、Tell me the way to the station. でよいのか、Would you tell me the way to the station(, please)? と言うべきなのだろうか。いきなり Would you ...? の表現を教えるのが難しいとしたら、中学3年生くらいになってから教えてもよいだろう。関連して、英語での断り方を教

えるときに、Can you come to the party? に対する返答として、I'd like to, but I can't. I have another appointment. くらいの表現は礼儀として教えるべきだと思う。

6 文法シラバスと機能シラバス

1980年代にコミュニカティブ・アプローチが流布したおかげで、英語教育においても役に立つ英語やコミュニケーションのための英語が重視されるようになった。このアプローチは、言語シラバスの面でも、文法シラバス(grammaral syllabus)から機能シラバス(functional syllabus)への転換を招き、文法軽視の風潮、つまり「これからはコミュニケーションが重要なことから文法は二の次でよい」という誤った指導観を生むことにもなった。コミュニカティブ・アプローチは、台頭した初期の理論であっても、その理念をよく読むと、「fluency as well as accuracy」と謳っている。つまり、コミュニケーションにおいて流暢さを重視しているが、文法の正確さを軽視しているわけではないのである。

7 習得と活用

最後に、本稿のまとめとして、新学習指導要領でキーワードになっている「習得」と「活用」について述べておきたい。「習得」とは、単語や文法のルール、発音の仕方などの主に言語材料に関する知識・技能、いわゆる基礎・基本の習得のことである。一方、「活用」とは、習得したものをできるだけオーセンティックな場で使ってみることである。たとえば、知識として得た文法を、読んだり話したりする活動の中で活用することである。そうすることによって、知識・技能がより一層定着することになる。

本稿は、木と森のメタファーを思い起こしたことを契機に、二項分類をしながら英語教育の課題について小論を述べた。大事なのはどちらかに偏ることなくバランスよく指導をすることである。このことが、自分の授業を振り返り、少しでも指導の幅を広げる契機になれば幸いである。

追記：教師には一人ひとりの生徒とクラス全体の両方を見る力量が求められる。